

81
174

伊蘇普實傳

堀三友等編



81-174



蘇門

絕代偉人

波透國氏題



伊蘇普實傳序

謹直に見へて横着なるものあり、磊落に見へて着實なるものあり、滑稽突梯、經薄浮淺の徒の如く見へても、而かも、内干鈞の膽を据へ、滿胸至誠の熱涙を湛ゆるものあまにあらず。リンコロン、カザールの如きは、其れ之の人乎。リンコロン一日國會に於て戲言を弄す、一議員奮然起て之を責めて曰く、今や大戦方に開け、誠士國に殉するの時、余は戲言を聽かんが爲め、此處に来るものに非ざるなりと。リンコロン直ちに答へて曰はく、請ふ暫らく許るせ、余若し隣時の以て呼

吸せらる處あるに非ずんば余か胸將に裂けんとする
 云々夫れ大人の心と到底小俗の推知し得べきもの
 にあらざるあり或時は口を開て大に笑ひ、又或時は
 眼を閉ぢて大に嗟む或は戯れ或は怒り、雨雪風雷の
 自然に發する如きもの之を眞人と云ふ伊蘇普物語
 は人の笑ふて讀む所のもの若かも志あるものより
 して之を觀れば一喩一言悉く儼然襟を正して謹聽
 ずべきものに非らざるはなし、彼れ伊蘇普は遂に其
 れ至誠熱血の士歟
 今や滔々たる世上多くは、皆落語家れ徒に非ずんば

則ち窄狹偏直の人而已、此時に當りて此傳出づ之を
 讀んで眞に聖賢偉人の腸を悟得するもの果して幾
 何ぞ其れ天回り地轉じ、内よ無量の變化を生じ、而か
 もその間た、一貫至誠の道の通するを觀るもの始め
 て共に伊蘇普の人物を語るべきなり聊る感あり書
 して以て序と爲す、

明治卅二年一月

東京 松村介石

序文

頃日、畏友秋野繁吉君一書を携へ來り、噎咽余に告げて曰く、此書元と余及親友故堀三友氏が病苦れ間を忍んで相共に編せしもの、稿成りて將に梓に上せんとするに當り、氏は端なくも病革りて、筆を他界に易へぬと、余之を聞て同情の涙に咽びつゝ、取つて披見せば、ふれなん、余が多年座右の愛讀書たる、イソツプ物語の著者イソツプの傳記なり、讀み來り讀み去りて轉た千歳の下知己相見の感胸臆は溢る、即ち君に勸むるに速し之を世に公にせん、ふとを以てすれば

君も亦た直に快諾して、上梓の業を余に托し且つ余の不肖に強ゆるに校閲の事と以てせらる余の不學不文何んぞ著者の意を満すを得ん。

六

思ふに今や邦家多事多端、教育、政治、文學、工業、宗教、慈善、等百般の事業、大に勃興して東洋文明の樞機は、専ら僅かよ三千里方たる吾孤島帝國の双肩に繫れを是れ宜しく正に胸中清涼洒落、一介の塵埃を留めず識見活卓々、洞破層雲の上に及び深淵の底に徹し機鋒、縱横圓轉、游刃物碍を劈解する底の、偉人物輩出せんよとを、渴望すべき秋にあらずや、此書若し世に一

出して、之等の要求に對し、世道人心を開拓するに於て聊か補益する所あらば、余及著者の共に、幸榮とする所元より論勿きのみならず、故壩三友君も亦た其れ天上に一層の安慰を増すを得ん乎。

明治卅二年一月

濃飛育兒院東京支部にて

五十嵐 喜 廣

序文

伊蘇普ハ。蘇玖拉的。亞利斯底的。孔丘。黃老輩ト比肩正
 適ス可キ古ノ聖人ナリ。蓋シ氏ノ聖智ハ生命ト共ニ
 之ヲ天ニ稟ケ教化傳修ヲ俟タズシテ自然ニ完成セ
 ルモノナリ。故ニ其物ニ接シテ活動スルヤ。迸發即應
 恰モ影ノ形ニ從ヒ響ノ聲ニ應スルカ如ク毫モ礙滯
 スルコトナキナリ。氏ハ之ヲ以テ紛ヲ解キ。難ヲ救ヒ。
 身ヲ護シ。人ヲ助ケ。國ヲ保チ。世ヲ濟フ。其功績モ亦偉
 ナリト謂フ可シ矣。且ツ氏ハ頑愚蒙昧ノ世ニ生レ。其
 道理ヲ以テ悟シ難キヤ。則チ犬猫虎豹獅子狼等ノ實

物ヲ藉リ。假テ以テ眞ヲ説キ譬喩ヲ以テ道ヲ談ズ。其言卑近ト雖モ其旨深遠ナリ。所謂伊蘇普物語ノ如キ其書各國ニ行ハレ。皆以テ兒童修身ノ教科ニ引用セリ故ニ伊蘇普ノ名ヲ稱スル。三尺ノ兒童尙能ク之ヲ記ス而シテ獨リ怪シム。其傳記實履ニ至テハ大人學子尙之ヲ知ル者希ナリ。是豈ニ史傳ノ欠漏ニ原因セザルヲ得ンヤ。乙未ノ歲余病ニ臥シ會佛人賦恩底奴氏ノ詩集ヲ閱ス。其書伊蘇普ノ傳紀ヲ掲ク。固ヨリ略傳ニ屬スト雖モ亦以テ伊氏一代ノ言働ヲ概知スルニ足ル。而シテ紛難ニ際シ其頓才英智ノ煥發スル所

十

ニ至テハ不覺快哉ヲ呼ビ。萬床ノ鬱悶ヲ忘ル、ユト屢々ナリ余甚々之ヲ愛讀ス。郷人秋野君文才アリ。余ノ病ニ罹リシヨリ日夕侍坐病ヲ看ル。余依テ病苦ノ暇。原書ヲ執テ臥ナカラ漸ク全編ヲ卒フ。君乃チ之ヲ一卷ノ書冊ニ編シ。題シテ伊蘇普實傳ト云フ。曰ク此書以テ史傳ノ缺漏ヲ彌縫シ。彼ノ名ヲ知テ實ヲ知ラザル者ノ參考ト爲ス可シ。病ムト雖モ強テ一片ノ言ヲ叙セヨト余笑テ之ヲ諾シ乃チ此序文ヲ作ル。

明治廿八年乙未九月

伊蘇普實傳

法學士 故堀 三友 共編
帝國大學生 秋野 繁吉

伊蘇普の生

伊蘇普はヒリダリの一賤民にして羅馬建國七百年代頃の、アモリウムと云ふ片由舎に生れたる。伊蘇普の生誕に付きては或は天恵を受けたる人の如く、或は天罰を蒙れる人の如く果して天に對して勝すべきか將た却て苦情を鳴すべき乎を判定るに難かりき。何となれば造物主は如何なる趣考にて伊蘇普を造りしものか其の腦體には極めて微妙不可思議なる智慧を授けたるに拘らず其の容顏の醜きこと殆んど人間の顔とは思はれざるのみならず生れながらの嘔吐にして言語の使用さへ全く出来ざる不具者に形をつくられたればなり斯る有様なれば例令以伊蘇普の奴隸となるべき身分の家に生れざるも到底他人に使役せられて生活すべき人物としか思は

伊蘇普實傳

れず。且つ伊蘇普の性質は極めて寡慾正直にして、富貴幸福を貪るの心なく、此等のものには眞に淡泊無意の人なりき。

斯る醜兒を有せる彼れの父母は、果して彼れを奴隸として賣り渡すことには躊躇せざりき。

彼が第一に奴隸として事へたる主人も亦た伊蘇普の醜き容貌を目に見ることの忌まはしき爲か、又は彼は他の業務には用立たぬ者と思へる爲めか、直ちに程隔たりたる山里に送りて、土地の耕作に従事せしめ、已れの側には置かざりき。或時主人は已が所有せる土地の耕作を見んものと、此の山里に巡り來りしに、一人の農夫は彼れにさも甘げに熟したる葡萄を捧げたり。主人は喜びて之を玩味せるに、其の味の甘きこと甘露の如くなりしかば、皆なまで食せず餘れるをアカトプスと呼べる。從者に預け、余の沐浴より歸れる時に再び持ち來るべしと命しけり。然るにアカトプスは主人の斯くも大切にす葡萄は如何に美味ならんと密かに一ツ二ツ盗み食しけるに、其の風味の美なること云はん方なければ、獨にて食するは後の罪恐ろしとて、仲間の者二三人を誦ひ主人の浴場より歸らざる間に、悉く之を食い盡しぬ。此

時遇然にも伊蘇普は用事ありて此室に入り來りければ、アカトプス之を見て善き機會ぞと、密かに仲間の者と打ち語り、自己等の罪を伊蘇普に被らしめんとぞ企てける。彼等は元來伊蘇普を馬鹿者と思へるのみならず、言語も通せざる啞なれば、如何にするとも已れの食はざるを辨解するまど能ふまじと思へるより、斯くい淺薄にも巧みけるなり暫くして主人は沐浴を畢りて歸り來り、直に以前の剩し置たる葡萄を求めけるに、アカトプスは何に食はぬ顔して奥に入り、忽ちあひたりしく歸り來りて、恐るゝ主人の前に手をつかへ、深くも仕舞ひ置きたる葡萄は、何者ともし知らず、皆な食ひ盡して候と、眞顔に訴へければ、側にて聽き居たるアカトプスの一味も此處ぞと思ひ、其は疑ひなく伊蘇普の所業なりと、口を揃へて讒訴しければ、主人は痛く打ち腹立て、うは怪しからぬ下郎かな、早く其奴を引き出せと、意氣卷きたり。アカトプスは得たりと、直ちに伊蘇普を主人の前に引き据けるが、そも昔時已の使役する奴隸に對しては、極めて殘酷なる譴責を加ふるが常にして、僅かの事にも使役主は烈しく之を鞭答し、生殺の權も其の意のままなるに、况して主人の愛玩せるものを窺み取るなど、其の罪惡極めて大なる所業にして、如何なる呵責

を受くるやも知るべからず。伊蘇普は實に恐ろしき冤罪を蒙りたりしなり。然るに憐むべき伊蘇普は、少しも騒げる氣色なく、手眞似を以て漸時刑期の猶豫を乞ひしに、幸ひに主人の許を得しかば、やおら立ちて一杯の水を持ち來り、主人の面前にて一息に之を呑み干し、直に指を口中に指し入れて嘔吐せしかど、一点曇りなき純潔水の如き心よりは、又水の外向物も出でざりけり。伊蘇普は徐に之を指し、主人に向て並居たるアカトプス等にも、斯く爲さしめよとの意を示しければ、主人は扱こそと膝を打ちて其の頓才を驚嘆し、直ちにアカトプス等に伊蘇普の如く爲すべきを命じたり。アカトプス等は意外の事に膽つぶれ、余りに侮り過ぎて遂に思ひもよらぬ不覺を取りたる事云ふ様もなく、口惜しければ、主人の嚴命賦しがなく、態と落付たらん見振して、伊蘇普の爲し、如く水を呑みて指を口中にさし入れしかば、後聞き所あればにや、流石に奥に入れかねしを、主人はいよいよ怪しと見て、強て奥深く入れさせれば、無殘や水を吐き出すと共に、盗み食へる葡萄をば、あたり嫌はせ吐き散らしぬされば、アカトプス等が、甘しと思ひしは、瞬間にて忽ち主人の激怒を受け、主人の大切なる物を盗み食へると、罪なき他人を罪に陥れんと企てたる

修行の塵報
生來の不具
悉く全備す

の二重の罪を得て遂に主人の家を追ひ拂はれしが、伊蘇普は其の頓才によりて已が潔白を證明し、反つて益々信用をぞ得たりける。其翌日、主人も此村を出立しければ、伊蘇普は平常の如く耕作の業に従事す、折しも三伏の候にて、金石も鎔けんばかりの暑なれども、毫も鋤鉞の手を離さず、一心に耕作を勵み居りしに、會々五六人の旅僧路に迷ひて此處に來り、伊蘇普に向ひて都の方に行くべき路を尋ぬされど、伊蘇普は言語の叶ぬ身なれば、旅僧等を木蔭に慰はしめ、急ぎ身仕度して旅僧に對ひ手擬似を以て、道案内せんと、意を示しければ、旅僧等は、大いに忍こび、伊蘇普にぞ従ひ行きける。伊蘇普は甲斐なく、しくも、旅僧等を都の大路迄案内し畢て、偕て別れて歸らんとしけるに、旅僧等はかゝる炎天をも厭はず、遠く道に來りし伊蘇普の善心を深く喜び、許多度其厚意を謝し、且つ天を仰ぎて此の仁惠深き伊蘇普に、必ず報酬を授け給へど、三度祈りて立ち去りけり。却つて伊蘇普は己が棲家に歸りしに、炎暑と歩行とに心魂太く疲れ果てしかば、木蔭の風が吹れつゝ、肌押し開き汗を拭ひて憩つ居りしに、いつの間にか我知らず其まゝ、華胥に遊ひける。折柄何處より來りけん、白髮の一老人身に白き衣を纏ひ、忽然とし

伊蘇普の舌を
折つて伊蘇普
の身を買ひ取る

て伊蘇普の前に現はれ出で物をも言はず腕差し延ばして伊蘇普の口を開き舌を
 捻るよと思ひつゝ驚き覺ひれば何ぞ計らん木の下の蔭の假寐の夢總身に浸され
 て、今のは夢ありしかと思はず漏せし獨言の不思議や苦もなく話し得るに二
 度吃驚して猶ほ是れ我れは夢中の人かど、ウロウロと邊を見回しつゝ車一輛馬一
 ……扱て不思議！と何事も已がまに言ひ出で少しの淀みも無かりしかば
 さては夢に見し老人を已れに言語の術を授たるなれ奇妙々々と折舞雀躍手の
 舞ひ足の躩み處をも知らざりしを推し計られて哀なり此の不思議なる出来事こ
 そ伊蘇普が其第一の主人を代へ其赫々たる名譽を表はすの原因とはなれりけれ。
 爰に奴隸等の監督者として諸事取締を爲すゼナスと云へるものありしが至て腹
 黒きがうへに短氣者にて屢不常なる處置を以て奴隸等を苦しめけるが或時毫も
 罪なき一人の奴隸を已が言付を拒みしとて大に腹立痛く鞭打ち折檻しけり伊蘇
 普は兼てゼナスを快からせ思ひ居たれば此の亂暴なる處置を見て黙視し難くゼ
 ナスに向ひ二言三言争論して其亂暴を押し止めしが少しも聞き入れざりしを以
 て伊蘇普もさらば主人に見えて其の亂暴を訴ふべしとぞ嚇しける剛惡なるゼナ

スは斯くては已れの身の一大事と大に恐れ伊蘇普に先立ちて主人に見へ伊蘇普
 は近頃不思議の事より言語を談せるに至りけるが日々主人の悪口を我等仲間
 言ひ聞かするより兎角に我等が命令も用ゆるものなしなと言葉巧に諷しければ
 主人は忽ち之を信じて以ての外に憤りてさらば伊蘇普の一身は汝に任すべければ
 如何なる處置を爲すも勝手たる可しと命じければゼナス任濟したりと心喜び急
 ぎ己が仕事場に立戻る折しも一人の貿易商人入り來りて好き獸類にてもあらば
 買受けんと云ふにゼナスは折あそ好ければ商人に向ひ好き獸とては無ければ一
 人の奴隸を賣らんと思へば之を求められよとて伊蘇普を呼びて商人に示しける
 に商人は伊蘇普を見て其の容顔の余りに醜きに驚き沸然としてゼナスに向ひ御
 身は我を嘲弄するかと云ひたるのみ買ひ取るべき様子なかりしが伊蘇普は商人
 に向ひ御身忍んで我を購れよ必ず用立つとあもあらん例へば若し剛情なる小兒
 ありて命を用ひざるまあるとき我を其の小兒に見せしめば必ず恐れて其惡戯
 を止めん去れば余を購ふは決して無益の業にあらせと云ひけるが此言葉何とな
 く商人の氣に叶ひ遂にゼナスと談判して三オポールの代價にて伊蘇普を購ひ取

り好き獲物もあかりしがさりとて亦た大金を費さなければ左程の損得なしとぞ獨
語しける。

伊蘇普の頓
才空囊を擔

さて此商人は諸處にて多くの奴隸を買ひ求め之を他に賣渡さんが爲めエヘーヂ
の方に立せんとしてあまたの奴隸に各々其の力に應じて荷物を分擔せしめた
りしも、新來の奴隸は未だ勞苦に馴さればとて何時も荷物の負擔を許すの習慣な
りければ奴隸仲間の者どもは伊蘇普に向ひ荷物を擔ふと否とは自由にせよと云
ひけるに伊蘇普却つて之を拒み、中にも最も重き繩匏を入れたる囊を負擔はんと留
みければ、譯しらぬ奴隸等は皆な其の愚を嘲り笑ひしも伊蘇普少しも頓着せず負
ひ行く程に、其日の晝飯時より食時毎に其の分量漸く減じ、夜に入りて又翌日にな
りては益軽く、二日目の後には遂に全く空囊となりければ、伊蘇普の肩は人より先
きに軽くなりぬ。是も亦た伊蘇普の頓才なりけり。

伊蘇普哲學
者の奴隸を
な

かくて貿易商人はエヘーヂに於て大抵の奴隸を賣り捌きけれども、尙ほ藝能家と
謠曲家及び伊蘇普の三人を残しければ、更らにサモースと云へる處に行きて、藝能
家と謠曲家の二人をば、美麗に着飾らしめて市場に出だせしむ、伊蘇普は何の飾を

伊蘇普の醜

もせせ唯其の側に坐せしめき斯くて多くの買入集ひ來りけるが、其の中にクサン
チヌと呼べる哲學の先生あり、此三人の奴隸を見て、先づ藝能家と謠曲家に對ひて
如何なる業を爲し得るやと尋ねしに、二人は何事にも爲し得ぬことなしと答へ
たり。之を聽て何思ひけん傍らにあるかの伊蘇普は、大口あけて打ち笑ひけるに、其
顔付の可笑さ不思議さは、忽ちクサンチヌと彼の從者に一種奇妙なる風覺を與へ
たり。クサンチヌは又た各奴隸の價を問ひしに、謠曲家は一千「オポール」、藝能家は三
千「オポール」にして、伊蘇普は僅かに六十「オポール」ありと答ふ。クサンチヌは藝能家
と謠曲家との値の甚た高きに吃驚せしが、さりとて一人も購はずして歸るも、本意
なき業と思ひしに、從者も彼の笑ひし奴隸の顔こそ妙なれとて、頻りに伊蘇普を購
はん事を勧めければ、遂に意を決して、伊蘇普に向ひ、汝は何を爲し得るやと尋ねし
に、伊蘇普之に答へらく、我が二人の兄弟は何事も能く爲し得るなれば、我は何事
も爲し得ずとぞ答へける。此答も亦た可笑しとて、クサンチヌはいよ／＼伊蘇普を
六十「オポール」にて購ひける。

哲學者クサンチヌの夫人と言へるは、極めて氣儘なる婦人にて、夫クサンチヌさへ

顔クサンチ
コス夫人を
驚らす

伊蘇普造化
の妙理を既
述する主人の
恥辱を蔽ふの

伊蘇普實傳

常に此の婦人の爲めに氣を遣く程なれば、大抵の人は容易く婦人の氣に叶ふものなかりき。斯る夫人なれば、クサンチヌスは今怪物の如き伊蘇普を購ひしもの、直ちに其の眞實を打明けなば、夫人の怒りは如何ならんとして、暫らく之を騙くに如かずと思ひ、年若く容貌美麗なる奴隸を購ひ得たりと言ひ遣りけるに、夫人は更なり、夫人の侍女等は、主人が如何なる美男を連れ來るならんかと、待ち居たる程に、間もなく歸れる主人を迎へて、連れ來れる伊蘇普を一目見るより、大に驚き呆れて、言葉もなかりしが、中にはあまりの恐ろしさに、其場に得居らず逃げ出せるものさへあり。クサンチヌス夫人は之を見るより、烈火の如く怒りかゝる怪物を家内に連れ込むは、畢竟飽きはてたる妻を放逐する爲めの心あらんとて、遂には己が財産を受け取りて、里方へ引取らんと、途言ひ募るに至りしも、クサンチヌスの辛抱強きと、伊蘇普の才智によりて、さまざまに夫人の氣を慰め、漸々にして事無く治まりき。或日クサンチヌスは伊蘇普を伴ひて、とある植物園に遊びけるに、植物園の主人は、クサンチヌスを哲學者と見て、一の問をぞ發しける。則ち己れが、日々注意を凝らして培養する植物は、充分に能く發生するものと少なく、却て土地より、自然に生ひ立ちて、少

しの培養をも加へられず、肥料をも受けざる植物の、能く成長發育するは、抑も如何なる理ぞと申しけるに、クサンチヌスは何の考もなく、唯造化の作用なりと答へたり。側らに付き従へる伊蘇普は、己が主人の漠然雲を掘ひが如き答を聞きて、覺えず失笑し、主人の袂を引きて片陸に連れ行き、彼は主公を哲學者と見て、彼の問を發せしに、主公の答はあまりに漠然として、答とするに足らず、就ては今一度、此園の主人に向ひ、斯様々々に云ひ給へど、勸めければ、クサンチヌス其意を得て、植物園の主人に向ひ、只今の問は、我が答ふる迄もなく、我が引き連れたる從者にて、も充分解答を爲し得べければ、疊さには我故らに漠然と答へたり、君若し更に精しく之を知らんとならば、これなる從者に尋ねべしとして、伊蘇普を指し、已れば他の方へ立ち去りける。さて植物園の主人は、伊蘇普に向ひ、其説明を聽かんあとを望みしに、伊蘇普答へて云ひけるは、爰に一寡婦あり、多くの小兒を連れて、一鰥夫に再嫁せるに、此鰥夫亦た多くの小兒を有せりとせんか、今此の婦人之に嫁して新妻とならば、己が生める小兒等を待すると、先妻の兒童を遇するとは、飲食衣服に至る迄、我が見に偏するは必然なり。土地も猶ほ此の如し、人の耕耘勞働により、培養を得たる植物は、恰かも先妻の

伊蘇普實傳

兒童の如し、さて又土地は此等の植物には拘らず、自然に發生する植物に、多くの榮養を與ふること、猶ほ此寡婦の己が兒童に對して、總ての愛情慈恵を以て、之を撫育するが如し、されば土地は、一方に於ては極めて慳貪なる母にして、又一方に於ては眞實熱心ある母たるなり、君が問ふ所の理、抑も之れに過ぎざるなりと、涎みもなく答へければ、園の主人は此答を聞き、千日の疑團一朝に解けたるが如く、大に喜ひ深く、伊蘇普の厚意を謝して、園中の物何なりとも望に從て進すべしと、途言ひ出でたり。

其の後數日を経て、伊蘇普の所業より間なくクサンテヌ夫婦の間に、一の波瀾を生じける。或日の事なりき、クサンテヌは、兎ある宴會に招かれて、饗應を受けたる時、一皿二皿の料理を伊蘇普に渡し、之を我が家内の最も愛すべき友に送れと命じける。蓋しクサンテヌは、其の最愛なる友と云へるは、勿論君が細君を指したるなり。然るに伊蘇普は之を持ち歸りて、悉くクサンテヌの平生愛し居れる、ヨンサーと呼べる飼犬に與へたり。かくてクサンテヌ宴會より歸り來り、其夜は酩酊して直に就眠せしが、翌日に至りて、夫人に向ひ、昨日の料理は如何に美味ならざりしかと、いと誇

伊蘇普の所業クサンテヌ夫人を離れせしむ

伊蘇普の奇才夫人なし、クサンテヌに

り顔に尋ねけるに、夫人は更に何事とも解せざる而持にて、夫の問を怪めり。クサンテヌは元より伊蘇普が、彼の料理を飼犬に與へたるを知る由なければ、稍疑念を抱き、早速伊蘇普を呼びて、昨日汝に持ち歸らしめたる料理は如何にせしぞと問ひけるに、伊蘇普少しも憚らざる、仰の如く僕は主公の最愛なる友に送れよとの命を受け、たれば悉くかのヨンサーに與へたり。吾も初の程は、夫人に送らるゝならんと思ひしかども、猶ほ熟考すれば、日頃僱の口争にも直く離縁を主張るが如き不貞實ある夫人は、是れ決して主公の最愛なる友と稱すべからず、之れに反して如何なる艱苦にも堪へ忍び、打擲に會ふて、益々忠義を勵むヨンサーこそ、眞實主公の最も愛すべき友あらめと思ひければ、悉く彼れに與へたるなりと、憚る所もなく答へたり。しかば流石の哲學者も理に詰り、しばしは默然として言葉なし。夫人は之を聞くや否や、日頃の我儘一時に激發して、烈火の如くに憤り、直様道具を取り片付け、なだめ止むるを聞かばこそ、席を蹴立て、里方に歸りけり。

クサンテヌは是に驚きて、或は親戚を頼み、或は朋友に謀りて、様々に妻の心を宥めて再び家に戻らしめんとせしも、夫人は頑として之を承諾せず。伊蘇普はかゝる節

伊蘇普賢傳
下の爲めに天
最上の佳
肴を料理す

探なき夫人は、主人の爲めに歸らすもがなと思ひしかど、主人の配慮のあまりに劇しきを見兼ね、又々一狂言を演じて見事夫人を歸らしめんとぞばかりける。さて翌日に至りて、伊蘇普は主人に請ひ、多くの婚禮道具を買ひ整へて、盛大なる婚禮を爲すもの、如くに擬り、多くの人夫を雇ひ、是等の荷物を擔はしめ、故らに夫人の里の前を通らしめたり。之を見て夫人の里の家婢は、何事ならんと出て來り、何處の儀式なるやを尋ねければ、兼ねて伊蘇普の内意を得たる人夫等は、クサンテヌスの先夫人里方に歸りたれば、新たに妻を迎へんとて、今此荷物を送るなりと答へたり。家婢は聽くより、直に斯くと夫人に告げれば、夫人は伊蘇普の謀りしに少しも違はせ、クサンテヌスの新婚を妨げん爲め、が將た嫉妬の爲めか、直様クサンテヌスの許に歸り、復々クサンテヌス夫人となりき。かればクサンテヌスの喜悅斜ならず、ひたすら伊蘇普の才智を歎賞せしが、伊蘇普は之を冷笑して止まざりけりとなん。當時哲學を修むる餘々は、互に其友を會して杯觴を傾くる折は、酒肴の美味なるを尙ふより、寧ろ理屈がまじき趣考を以て、響應するを常とせり。或日クサンテヌス其友を會し、一種奇妙なる新趣考を以て、客を饗せんものと、伊蘇普を呼びて、天下最上の

佳肴一品を購ひ來れど命じたり。伊蘇普畏まりて直ちに大なる牛の舌を求め來り、ソツツを始め種々様々の料理を調へ、馳て賓客の打ち揃へるを待ちて、牛舌の馳走を出せしに、始めの程は來賓皆な其の美味を賞讃せり。かくて出る皿も出る皿も同じく昔な牛の舌のみなれば、賓客も遂には飽きて不興の色顔に現れけり。クサンテヌスは此体を見て頗るあやしみ、伊蘇普を客の前に召して、我今日汝に命じ、最上美味の馳走を爲さしめしに、賓客の飽を來すが如き料理を調へしは如何と詰りければ、伊蘇普聞きも敢へせ、主公今日我に最も良きものを饗せよとの命ありたれば、さて此の舌を出したるなれ。凡そ世界に佳良の物多しとは云へども、舌に勝るものはよもあらじ。抑も舌ハ人間交際の索細あり、又學問の管鑰なり、其他宗教、教育、技藝、萬般の事に至るまで、悉く舌の力を籍らざるなし。舌あればこそ人を教ふるまども、出來、市府を建造し、又之を取締るまどを得べく、眞理正道を説明し、群衆の整理を爲すことをも得るなれ。且つ人世の最大本務たる神の聖徳を讚美することを得るも、亦た是れ舌の力ならずや。されば舌は人世行路の一大機關にして、世に之れより勝るものはなしと思ひたれば、即ち今日の響應に用ひたるなりと、いと爽かに述べた

りけり。此答を聞き、クサンテヌス及來賓も一同アツと許に感歎斜ならざりしが、中にもクサンテヌスは殊に興に入り、然らば明日も亦た今日の來賓を招待して懇すべければ、明日は天下最悪なるものを饗應せよと命じたり。之を聞ける賓客はますます歡を盡して、明日はまた如何なる趣考の饗應に預るやらんとひたすら約をつがへて歸りたり。

かくて翌日、約束の時刻に至りて賓客全く集りて、さて出されたる料理を見るに、昨日と同じ牛の舌あり、來賓は勿論クサンテヌスは大に怪み、又た伊蘇普を呼びて其由を尋ねしに、伊蘇普は落着顔に答へけるは、凡る人の喧嘩口論、單言讒謗は、是れ全く舌の爲す所なり。舌あるが故に人を欺き、人を騙り、都城をも傾け、六親を離反するに至る。例令ひ舌は一方に於ては真理説明の機械となり、神の聖徳を唱讚するものなるも、亦た一方に於ては謬説傳播の媒介となり、却て神聖を穢し、怖ろしき毒を流すものなり。且つ所謂誹謗讒誣の如きは、皆な舌より生ずる惡業なり。されば舌は總ての争論の母、訴訟を煽動する惡婆なり。是れ舌の天下最悪なるものとして、今日の饗宴に供せる所以なりと。之を聴くより主客の感嘆ますます深く、二三人の友人の

伊蘇普天下最悪の料理を調ふ

伊蘇普頓悟の怒を解く

クサンテヌス他人と違事な約す

如きは、クサンテヌスのひたすら世に有り難き僕を得たるを賀し、彼伊蘇普も亦た哲學の原理を心得居るものなれど、賞讃常に措かざりしとかや。又た或日のとなりき、伊蘇普は主人の用事を帶て、どある處に出て行きたる途中にて、クサンテヌスの知己なるさる法官に出會へり。法官も兼ねて聽く、伊蘇普の事なれば、何處へ行くぞと尋ねしに、伊蘇普は何思ひけん、いと無愛想に我は知らずと答へたり。法官は此答を聞き、痛く腹立ち、余れを輕蔑嘲弄するまそ奇怪なれ、いで牢獄に投じ呉れんとて、直に伊蘇普を拘引せしが、伊蘇普は法廷に引き出たされ、平然として法官に向ひ先刻我の知らずと答へしは、誠に正當なり、彼の時我は如何にしてか此の牢獄に來るを知らんや、と言ひしかば、法官も覺えず失笑し、遂に何事も尋問せせして放免せり。他日此の法官亦たクサンテヌスに向ひ、かゝる俊才の奴僕を得たるを賀せりと云ふ。

伊蘇普のクサンテヌスに於ける有様の斯の如くなりしを以て、クサンテヌスに取りては、伊蘇普の如き奴隸を得たるは、實に非常なる幸福にして、クサンテヌスに常に伊蘇普の救護によりて、種々の難局を免れ、名聲益々高く、人の尊敬を受くること夥しか

伊蘇普の妙
智益主人の

りきされば伊蘇普は之に依りて常に奴隸の境涯を脱せんと欲せしむ、クサンテヌスは容易に彼を解放するを首肯せむ。或日クサンテヌスは自分の朋友並びに弟子等を多く集めて宴會を催せしが、觴の廻も漸く繁くなりて主客共に大に酩酊し酒を飲むまどいよ、盛なりき。此時配膳の役目を蒙れる伊蘇普は、主客の悉く泥酔せるを見、彼等に注意して云へる様、凡そ酒を呑むには三段の階級あり初めの人酒を呑み、次に酒酒を呑み、終りには酒入を呑むに至る。是れ實に恐るべき害を生ずるものなりと、然れども座中の酔興は此の注意によりて止むべくもあらず、却て伊蘇普の注意を嘲弄して、獻酬益々盛んなりしが、終りにクサンテヌスは精神昏亂して、理非を辨へざるに至り、余は海水を悉く呑み盡すべしと、吟唱せり。座客は其言葉の余りに、恍惚大なるを笑ひたるも、酒に本心を失はれたるクサンテヌスは、ますます眞面目に之を主張し、余若し海水を呑み盡し能はざれば、余の家産を悉く諸君に呈すべしとて、遂には其の抵當として、日頃大切に飲め居たる指環をさへ取りて座客に渡しけり。然らばいよ、海水を呑み干すべしと、確と約を交へて其日は無事に退散せり。翌日に至りて、クサンテヌスの頭腦を攪亂せる酒氣、漸く消え失せて、稍本心に反りた

名を面
らしむ

クサンテヌ
ス名譽愈々
高し

ると同時に、己が貴重せる指環の見えざるを審し、伊蘇普を呼びて之を尋ねたり。伊蘇普は昨夜クサンテヌスの來客と約束せし状況落もなく物語ければ、クサンテヌス腰も抜けん計りに打ち驚き、其は到底出來得べき事にもあらず、さりとて若しそのまゝに捨て置きなば、家産も指環も空しく、人手に渡らん、如何に醉興なればとて、かゝる約束を爲せしとは、我ながら非常の過失なり。何とぞか之を救ふ方法なきやと、泣かぬ許りに伊蘇普に哀願しけるに、伊蘇普は騒げる色もあらず、さらば明日約束の場所にて、斯様く振舞へ給ふべしと、其急難を免るべき手段を教へける。扱て翌日は此高名なる哲學者が、愈々海水を呑み干す可き當日なりけれ、此の噂を聞けるサモースの人民の哲學者が如何なる手段をなして、此の不思議の術を行ふかと我も、と馳せ集けり。かのクサンテヌスと約束せる人々も、亦た如何にクサンテヌスは、靈妙ある奇術あればとて、到底約束を履行すること能はざる可しと、嘲りつゝ、約束せし場所に集りける。其時クサンテヌス群集の中に立ち現れ、悠然としてかの人々に向ひ、一の要求を爲して言ひける。機余は諸君とまこと海水を飲み干すの約束を爲せり、但し海水にあらざる水を呑むとを契約せざりき。然るに諸君も既に

伊蘇普主人
に解放を求む

知る如く海中には諸方より河水の流れ込むもの甚だ多し、されば約束を履行するに先ち此等の河水を悉く逆流せしめ海中に一滴の河水をも入るなからしめば、余は謹んで約束を履行せんと、群集はクサンテヌスの要求を聞き、其の理あるに感服し、扱てこそサモリス有名の哲學者なれど、譽めたゝえける。殊に約束せし人々は意外の要求に勝をつゑし、河水を逆流せしむるなどは到底出來得る事にあらざると、却て彼等よりクサンテヌスに請て、契約を破談せしかば、クサンテヌスは爲めに彼れの一家財をも失はず、却て人民より大なる賞讃を得て宅に歸れり。

さてクサンテヌスは酒興の上の妄言よりあふくも、非常の損害と耻辱とを蒙らんとせしも、伊蘇普の頓才によりて禍却て福となり、大に衆人の喝采を博して歸りければ、伊蘇普は其報酬として奴隸の身を解放せられんことを要求せり。然れどクサンテヌスは之を拒みて、汝を解放する時は未だ到らず。然れども若し神の託宣ありて二羽の鳩を降し給はば、直ちに汝をして奴隸の境遇を脱せしめん。若し又一羽の鳩を降し給はば、未だ解放すべからざるの神の聖意なりと答へける。其後間もなく伊蘇普の家を出んとせし時、二羽の鳩の樹上に留まれるを見たりしかば、伊蘇普の

伊蘇普主人
に解放を求む

直に之をクサンテヌスに告げけるに、如何にしけんクサンテヌスの立出でし頃には、唯一羽の鳩のみ樹上にどまり居りしかば、クサンテヌスは我を誑せりとて大に怒り、家僕に命じて伊蘇普を鞭答せしむ。折しもクサンテヌスは或る友人より晚餐の饗應に招かれたるに、伊蘇普は之を聞き、嗚呼二羽の鳩を見たる余は鞭を受け一羽の鳩を見たる主人は却て人の饗應を受く、神託も亦た信すべからずと、絶叫せり。クサンテヌスは如何に思ひけん、此言葉大に意に叶ひて、伊蘇普の鞭答を止めけれども、猶ほ奴隸の身分を免脱するまとは容易に許すべくもあらざりき。

或日クサンテヌスは伊蘇普を伴ひて郊野に散歩を試み、此處彼處を徘徊して古墳累累たる處に行き、あまたの墓碑に彫たる文字を見て心を慰め居りしに、見れば一つの怪げなる文字を彫りたる石碑あり。文字如何にも奇怪にして全く讀むこと能はず。蓋し此の碑文は或る文字の頭字のみを記したるものなりけり。哲學者は頗りに腦をなやませしが、遂に其意を解するも能はず。乃ち伊蘇普を呼び、汝能く此碑文を解し得るかと尋ねたり。伊蘇普は其文字を視、僕實に能く之を解す、されば今日前に之を解釋して、主公に一の寶庫を得せしめん、主公亦た如何なる報酬を僕に

與ふる哉と云ひければ、クサンテヌスは能くも考へず、果して汝が云ふ如くならば、余は汝一身の自由と寶庫の半を取らすべしと答へける。伊蘇普すなはち其碑文を解して云ひけるは、此石碑を隔つるあと四歩にして地中に一寶庫ありと、クサンテヌス頗る怪しみ、伊蘇普と力を合せて地を掘りしに果して一の寶物を得たり。伊蘇普は是に於てクサンテヌスの言を喰んことを恐れて、約束の如く自由を與ふるやと念を入れしに、クサンテヌスは少しく躊躇して伊蘇普に向ひ、我は未だ汝を解放するまじ能はき、何とあれば汝は僅に、此碑文の意味を解きたるに過ぎず。若し精密に之を解釋する時は或は一増貴重なる寶物を得るも知る可らざればあり、伊蘇普乃ち詳細に之を解て云ふ、其の碑に彫刻したる文字は、*At Obac, Bryara* 等の頭文字をのみ刻みたるものにて、其意は汝は碑より四歩退きて土地を掘らば、一箇の寶庫を發見すべしと云ふに外ならず。クサンテヌス之を聽きて益々伊蘇普の才智に驚き、いよく之を解放するを欲せず。汝は斯の如く伶俐なるを以て、余は誠心汝を放つを好まず。汝も亦た強て自由を求むる勿れと論しけり。伊蘇普は主人の素氣なき答に呆れ果て且はあまりに無情なるを憤り、此寶物は元來ドーニス王に屬するものなり。

サモリス國
に奇怪なる
現象顯はる

と碑文に見ゆ、故に主公若し前約を踐み玉はせば、我は之を王に訴へ出でんとぞ嚇しける。クサンテヌス其場は何氣なくすませしが、歸るや否や伊蘇普の足を鎖し、庫に一室に閉ち込めたり。伊蘇普絶叫して云へる、機哲學者が約束を履行するとはかくの如きものか、されど余は汝の爲さんと欲する所に任せん。何となれば己を得ずして我を解放せざる可らざる時期は直に當りに來るべければなり。と露ばかり悲し色もなかりけり。

果せるかな、伊蘇普の豫言は其實を現はすに至れり。一日不思議にも大なる着應舞ひ來りてサモリス共和國の議事堂の大徽章を掲み去り、之を或る奴隸の居住に投げ落せり。サモリス人は之を見て大に驚き、おれ抑々何等の凶徴ぞやと種々に奇怪なる評判を生じ、學者社會の大問題となりしが、當時クサンテヌスはサモリス國第一流の哲學者なりしかば、第一に其の諮問を受けたりける。クサンテヌス畢生の才智を奮つてさまざまに考ふるも、全く解するまじ能はざれば、例の豫言者伊蘇普に尋ねたり。伊蘇普答へけるは、此事實に易し然れども、今茲にては語り難し。主公若し僕を公衆の前に出さば、我主公に代りて之を公衆に告げん。豫言果して實に叶ひ之れ

伊蘇普家
の境界を
説明す

伊蘇普實傳
二十四
主公の功なり。萬一違ふことありとも其罪は一奴隷に歸するに過ぎずとクサンテ
ス大に之を讀し、乃ち伊蘇普の鎖縛を解きて自由の身とならしめ、公衆に紹介して
演壇に上らしめぬ。

伊蘇普の演壇に現はるゝを見るや、公衆大に嘲笑し、かゝる醜怪なる一奴隷の如何
にして此の如き大問題を解するやとて笑はぬものは無かりけり。されども伊蘇普
は毫も怯たれる氣色なく泰然として述ぶる様凡そ眞に事物の鑑識を爲さんと欲
せば徒に其の入れ物の醜美を見るべからず。其中にあるもの、善惡に付きて批評
すべきなりと、聽衆之を聽くや異口同音に恐るゝ勿れ充分に演べよ、而してあの奇
怪なる兆候を明かに判せよとぞ叫びける。伊蘇普靜かに言葉を繼ぎ、この度現はれ
たる氣象に付きては余一の考を有せり。然れども充分に之を述べ難し、何となれば
我はクサンテス氏の奴隷なり。されば余の述ぶる所若し違背する時は、主人の呵責
を受け例令云ふ所主人に勝るとも亦た鞭笞を免れず。是れ予の奴隷の身として詳
かに語り難き所以なりと、演べ來るや、公衆忽ち騒立ちクサンテスに迫りて、伊蘇普
を解放せしめんとせしも、クサンテス容易に之を許さざりければ、終にサモース人

リヂアン國
主サモース
人を征服せ
んとす

市長は其職權を以て、クサンテスに伊蘇普を解放することを命じ、若し之を諾せざ
るに於ては、相當の處分を爲さんと嚇しければ、今のクサンテスも詮方なく遂に伊
蘇普を解放して、茲に始めて自由の身とは爲せり。伊蘇普大に喜び深く公衆に謝し
扱て云ふ様、此度驚應の現はれたるは強大なる專制國の現出を示すものにして、我
が共和國の議事堂の徽章を攫取して、之を奴隷の居住に投じたるは、即ち其強大專
制の國王が、我サモース共和国を屬邦にせんと欲するの前兆に外ならずと、之を聽
くや、サモース人は大に驚き、如何なる動亂の起るかど、戦々慄々安き心も無かりけ
り。
其後數日を経て、果してリヂアン人の國王クレサヌと云へるもの、書をサモース共
和國に送りて、自今サモース國の我が屬邦と爲す貢物を獻せよ、然らざれば兵を擧
て、サモースを屠らんと申し來れり。サモース人は此告知書を得て、或は驚き或は怒
り、俄かに會議を開きて之を議せしに、今兵を起して之に抵抗せんよりは、寧ろ降
伏するに如かざるべしとの論多數なりしかば、遂に一國を擧てリヂアン人に降伏
せんとしたりしに、獨り伊蘇普大に之に反對し公衆に論して曰ひけるは、凡そ人間

伊蘇普實傳

伊蘇普を以て困難に換ふ

の運命に二筋あり、一は自由の道にして何人の制裁をも受くるまどなく不羈獨立自治を以て進むものなり。此道初めは險難あれども、終には爽快靜安にして極めて易し。一は人に屬隸するの道にして初めは平穩簡易なるも、終世醒醒として頭足を延ばす能はず。人固より前者に依りて進まざる可らず、何んぞ人の屬隸となり、踴躍して終世を送らんやとサモース人の元氣之れに勵まされ、決意忽ち一變して遂に隸屬を不可となし、使をシレヂユス王に遣はして其趣きを答へしめぬ。

總て使節はリヂニ國に到り、シレヂユス王に謁して使命を述べたるに、固より期する所なれば王は直にサモースを攻撃するの準備を爲さしめたり。サモースの使者此体を見て、シレヂユス王に言ひけるは、例令大王今大兵を下してサモース國を攻めんとせらるゝも、伊蘇普の在る間彼が國民の信用を失はざる間は、王の心勞も徒らに歸するを免れずと、シレヂユス王之を聞きて然らば其の伊蘇普なるものを吾邦に送るべし、而して我亦たサモースの自由を妨げざるべしと、使者國に歸りてシレヂユス王の命を傳へけるに、サモース府の人々は、大に喜び、一伊蘇普の身を以てサモース一國の自由を保持するまどを得ば、幸福之れに過ぐるなしと、一も二もなく

之を諾せんとせり、而して何人も伊蘇普を以て自由を買ふの極めて高價なるを悟らざりき。然るに伊蘇普は何とか思ひけん、初め先づ之に反對し、此喩を以て國民を諭して言ひけるは、一狼あり羊群と約すらく、若し犬を置として我に與へば、我は汝等の版圖を妨害せずと、賢からぬ羊群は此言を信じて、自分等の守護者を狼に與へたりき。かくて、狼は既に羊群に守護者なく、已れに抵抗するものなきを幸ひに、心のみ羊群を屠り殺して、已れの腹を肥せりと、サモース人は初めて伊蘇普をリヂニ國に與ふるの不可なるを悟り、伊蘇普は吾がサモース國の守護者なりと論じけるを、伊蘇普更らに又た言ひけるは、然しながら、吾今若しシレヂユス王の側に到らば、却てサモースの爲めに益する所あらんとて、遂に自らサモースを出で、シレヂユス王の旗下に投じけり。

シレヂユス王は伊蘇普の自ら軍門に降りて聞き、呼び入れて之を見、其の形容の醜惡なるに愕然として、如何なれば斯る侏儒が、吾に抵抗を試みしかと、信疑の中に迷ひけるが、其時伊蘇普は、恭しく王の前に三拜して言ひけるは、一人の男あり、一日蚊蠅を殺さんとせる折しも、一疋の蟬目前に飛び來れるを見て之をも打ち殺さんと

伊蘇普を以て困難に換ふ

せしかば、蟬哀し氣に言へる様我れ空蟬のもぬけのからを出でしより、此處の森彼處の林と飛び廻り未だ人の麥畑を荒せしこともなく、其他害有る作業は少しもなさいるを何故我を殺さんとするや若し強ひて足下の妨を爲すと云は、我が終日悪意なしに吟せる聲のみなりと、其人之を聴きて言の理あるに感じ、遂に殺すを止めたりとぞ。大王よ某は實に此の蟬に類するものあり。余は王に對して防禦抵抗の所作を爲さず、たゞ國民に向ひて一場の演説を爲せしのみ強ひて余の罪を問は、蟬の鳴き聲に等しく演説したる聲に過す。願くは大王敏察する所われど、クレテオス王頗る感動して頻に惻憫の心を生じ、忽ち伊蘇普を許せるのみならず、永くサモース國の自由を妨害せざりきとぞ。

此時に當りて伊蘇普は、彼の有名なる伊蘇普物語を著せり。伊蘇普初めに之をリヂー國王に獻トリヂー國王又之れをサモース共和國に送れり。此著る伊蘇普が非常なる名譽を博したる原因にして、其頃よりして伊蘇普は諸國を遍歴し、當時の碩學博士等と互に議論を上下せしが、終にパピロニアに到り、其國王リセリヌスに事へて大に其信用を受けぬ。當時の流行として、各國互に謎の如き難題を贈答して能く

伊蘇普物語
ナ者ス

伊蘇普アン
ニヌスの爲
るに就せら

答へたるものには褒賞を贈り、答ふる能はざるものは料料を出す等の事盛に行はれしが、パピロニアの王リセリヌスは伊蘇普を得てより、常に能く難問を解し、又能く難題を發するにより、名譽各國に轟けりと云ふ。

其の後伊蘇普は妻を娶りしかど、子なきが爲めにパピロニアの或る貴族の息アンニヌスと云へるを養子とせり。然るにアンニヌスの素行修らざり、破徳の行多かりため、遂に伊蘇普の耳に入りて放逐せらるゝに至りしが、アンニヌスは已れの非を悟らず、却て深く伊蘇普を恨み、密に書類を偽造して王に奉り、伊蘇普がリセリヌス王と不和なる諸國の王と誦らひ、陰謀を企て居るが如く讒せしかば、リセリヌス王は其書類に伊蘇普の捺印あるを見て、忽ち之を信じ、充分の尋問をも爲さざりて、直に朝臣エルミビヌスと呼び、伊蘇普を殺すべしと命じたり。されどエルミビヌスは平生伊蘇普と心易く、夙に伊蘇普の天稟の達識を愛し、且つ伊蘇普の罪は全く讒者の爲めなる事を知りしかば、密かに伊蘇普を我邸に隠匿し、國王には既に伊蘇普を誅したりとぞ奏しける。かくて伊蘇普死せしむの詔判諸國に聞えければ、其才を愛せしものは之を惜み、其才を妬みしものは之を喜び、悲喜交々なる中にも、埃及の王テクテナポア

の如きは辨舞雀躍してリセリヌ既に手中に在りと思ひ先づ難題をリセリヌに送りて空中に墮垣を造り得る工人及び總ての難問に答へ得る人物を送られよと申込めり。リセリヌ王は此要求を受けて大に當惑しあらゆる國中の識者を集めて如何に答ふべきやを評議せしも誰ありて妙技を出すものなければ王は坐ろに殺せし伊蘇普を追想して嗟呼彼を殺せしは我が過なりと嘆息せる折しも傍らに待れるエルミピスは時ふそよけれど進み出で伊蘇普の罪を得しはアンノヌスの爲に讒誣せられたるにて決して陰謀を企てたるにあらざることを見しければ王は益々嘆き悲み自が疎忽よりその罪なき大偉人を殺せる事後悔たゞに万干なる老愛に於てエルミピスは膝を進め小巨巖に命を受けし時元其罪無さを知りしかば王命に違ふは恐れあれど密かに伊蘇普を助け我家に隠し置き今猶ほ存命なりと白しければリセリヌは大に喜びエルミピスの功を賞し急ぎ使を遣りて伊蘇普を招きけり罪なくして幽囚の月を嘆ちし伊蘇普は久振に國王に謁見しけるに王は恰かも再生の人に遇へるが如く先づ懇ろに疎忽に宣告を下せるの罪を謝してさまた伊蘇普を款待し且つ先づ埃及王より來れる難問を示し切に其解答

伊蘇普難問
を免れ
アンノヌス
を免れ
伊蘇普の戒
を受く

を聽かんまどを乞ふ伊蘇普は其の口狀を見て唯打ち笑へるのみ困じたる氣色もなく只だ明年の春に至らば工人と難問の解答者を送るべしと埃及王に答へける。リセリヌは伊蘇普の財産を悉く復し且つ讒者のアンノヌスを伊蘇普に與へ其の處分を任せけるに伊蘇普は毫も怒れる色なくしてアンノヌスを見るとき子の如く讒を擲へて父を悪ひたる罪の購として左の數ヶ條の件を守らしめけり。

第一神並に君を尊敬するまじ。

第二勤めて溫和謙讓を主とすること。

第三婦人を憫み能く待遇するも決して秘密を語るべからざること。

第四沈黙を尙びて多辯を擯斥する事。

第五困難災害不幸に遭遇するも決して落膽失望すべからざること。

第六生て友人の邪魔物となるよりは死して敵國に喜ばるゝの潔傑となるの勝れるを考へ固く將來を慎むべき事。

第七他人の幸福徳望を羨むことなく勤めて己れの悪業をさくりに注意すべき事と斯く自己の罪を問はざるのみか懇切慈善なる教訓を受けたれば流石にアン

ニヌも前非を悔ひて善心に立ち歸りしが、後幾くもならずして天死せるを、伊蘇普にとりては口惜き次第なれ。

さて伊蘇普はテクテナポフの難問に答へんものと先づ四羽の小鷹を飼養して一枚の板に小兒を乗せ其の四方を廻みて、只管之を空中に持ち擧ぐることを馴らしめけり。其年も暮れて約東の春に至りければ、伊蘇普は此等の物を携へ、自ら難問の答辨者として埃及國に出立せり。テクテナポフは全く伊蘇普を死せるものと忠ひしかば、かゝる難問を送りてリセリヌスを苦しめんとせしに、今伊蘇普が自ら來れりと聞きて、驚愕するまど一方ならず詮方なくして伊蘇普を宮中に招き兼ねて要求せる工人と難問の解答者を連れ來れるやを尋ねたり。伊蘇普答へて難問の解答者は臣不肖ながら其任に當らん彼の空中に牆壁を作るの工人は、之を作るべき塙所に到りて高覽に供せんと述べたりければ、テクテナポフは二三の朝臣を従へ、伊蘇普と共に廣き野原に出で行きて、様子如何にと打守れり。伊蘇普は得意氣に兼ねて馴養したる鷹を大空に放らしに、鷹は小兒を乗せたる吊り板を握み、高く空中に舞ひ舞りて、兼ねて救はれたる如く、よき程の處に止まれり。小兒はいと心地よげに空

伊蘇普埃及に到る

テクテナポフの才智を驚嘆す

中より大音擧げ是より建築に取り掛るべければ、牆壁を作るべき總ての材料を此處に運べよと呼ばりたり。伊蘇普はテクテナポフに向ひ聞かると、如く空中に在る工人は材料を望めり、速かに之を送られよと、テクテナポフは宮中に歸り、更らに伊蘇普に感じて、全く伊蘇普に心服せり。かくてテクテナポフは宮中に歸り、更らに伊蘇普に難問を發して曰ふ、機我に四頭の牝馬あり。此馬埃及にありながら能くハビロニアに在る牡馬の嘶く聲を聞き取るを得るなり。如何に之れに答へ得るやと尋ねけり。伊蘇普は思案する体しなく、明日中に答へ申さんとて、己れの宿所に歸るや否や、從者に命じて一疋の猫を捕へ、之を鞭ちつゝ市中を走せ廻らしむ。當時埃及國人の習慣として猫を神と崇むる事大方ならざりければ、人々此体を見て痛く憤り、神明に對して不敬の所爲ありとて、忽ち猫を奪ひ從者を追ひ拂ひて其由を國王に訴へける。國王も捨て置き難く、直に伊蘇普を呼び出し、卿は此獸の如何ばかり、我邦に尊崇せらるゝかを知らざるか、如何なればかゝる虐待を爲さしめたるかと詰問せるに、伊蘇普答へて申しけるは、此猫こそ昨夜我が國王リセリヌスが日頃大切に手飼せる雞を咬み殺したるものに候去れば、其の不敬の罪を罰せん爲め、かく處分を爲せる

伊蘇普買傳
解く諸問心

なりと王きくもあえず怒を含み虚言も事におよれ此猶如何にして昨夜の中に
 ハビロニアに行き、リセリヌス王の雞を捕へんやと伊蘇普すかさず答へけるは、さら
 ば如何にして王の愛馬が埃及に在りて、ハビロニアの牝馬の嘶くを聞き得るを知
 らるゝやと、流石の王も啞然として返す語もなかりけり。

チクテナポフは又たコリオポリス府に有名なるあまたの難問解答者を呼び集め、
 伊蘇普と對談せしめける。學者等種々の難問を發して伊蘇普を苦めんとせしが、伊
 蘇普少しも屈する色なく、一々之を解き破りて、應答水の流るゝが如し。最後に一度
 口を開き、茲に宏大なる寺院あり、十二の市府によりて圍繞せらるゝ、一本の柱を以
 て維持せられ、各市府には各三十の外廓あり、而して此外廓の周圍には二人の女巡
 廻せるが、一人は白く一人は黒し、御身は之を何と解するかと言ふ。伊蘇普之を聞き
 て大に笑ひ、かゝる問題は我がハビロニアにては、三尺の兒童もなほ能く之を解く
 を得るなり、所關寺院にて世界を言ふ。その一本の柱は年曆を指し、市府は月、外廓は
 日を云ふなり。而して周圍に巡廻する白黒の女との即ち晝夜を意味するぞと答へ
 けり。

伊蘇普買傳
ハビロニアに歸

翌日王は大に同族及び臣下等を集め、伊蘇普を招待して盛に饗應を爲しけるが、宴
 酣なる頃、チクテナポフは其の友を顧みて伊蘇普を指しかゝる。短矮醜惡の半人間
 がリセリヌス王をして常に勝を得せしむるの原因なりとは、眞に不可思議なりとて、
 伊蘇普並びにリセリヌス王に夥しき贈物を爲して伊蘇普を歸らしめぬ。伊蘇普のハ
 ビロニアに歸着するや、國王リセリヌス喜び一方ならず、親ら遠く郊外に出で迎へ、非
 常なる歡を表したりき。其れより後は王の寵遇益々深く、遂には伊蘇普の爲めに
 紀念像を築造して彼を賞するまでに至りけり。されど伊蘇普の諸國廻歷の念慮は
 再び起りて如何にすれども制する能はず、遂に總ての名譽を棄て伊蘇普の爲めに
 は實に幸福榮達の基本たるリセリヌス王の勅庭をも辭して、諸國遍歴にぞ出て立ち
 けるリセリヌス王は日頃寵遇限りなき伊蘇普の旅立になじかば、離別を哀まざらん
 や、親ら遠く郊外に送り、伊蘇普の手を取りて涙を流して若し恙なく遍歴を果てな
 ば、必ず復び此ハビロニアに歸り來れよと、幾度となく懇諭して別れけり。

吁流水再び歸らば、誰か知ん彼が再びハビロニアの土を踐まずして空しく泉下の
 鬼とならんことを、さても伊蘇普は意を決してリセリヌス王と別れ、諸國を遊歴して

伊蘇普買傳
ハビロニアに至る

伊蘇普買傳
諸國に出立

到る所に彼の獨得なる一種靈妙不可思議なる比喩的の演説を爲し、等しく住民の歡迎を受けたり。かくて或時「デルフ」と言へる都に到りけるに、府民は伊蘇普を迎へ喜んで其の話を聴きしかば、如何なる故にや少しの名譽をも彼に與へざりしかば、伊蘇普は心に其冷淡なる所業を憤り、或日公會の席上にて「デルフ」人を以て波の上に漂流する杖に譬へ、遠方より海面を望みて此杖を見れば、如何なる珍物ならんと思像せらるるも、近づきて之を視れば、寔に無趣無用の木片に過ぎずと云ふの意を以て「デルフ」人を誹謗せしかば、此言大に「デルフ」人を激せしめ、府民は遂に伊蘇普を殺さんまを企てけり。扱て其口實を設けん爲めに、密かに伊蘇普の荷物の中に其府の神殿の器物を入れ置きたり。神ならぬ身の伊蘇普はかくる陰謀ありとはつゆ知らざり、デルフ滞在の日も重なれば、翌日行李を修めて該府を出立し、「ボシー」府に向ひけり。さて「デルフ」人はかねて巧みし事なれば、伊蘇普の大凡そ四五町も進みたらん刻限を計り、急に夥多の人数を催ふして跡を追ひ、遂に伊蘇普を捕へて「デルフ」の神物を竊取したる罪を責むるに固より覺なき伊蘇普は、天地神明に誓てかゝる悪業を爲さざと公言すれども、「デルフ」人は少しも聽かず。さらばとて伊蘇普の行李

伊蘇普府民
ニ陷ル

を解き、檢めしに道はいかに思ひもよらぬ「デルフ」の神物の顯はれしかば、伊蘇普の辨解は悉く無功となり、神明に對して大罪を犯せるものなりとて、鐵鎖を以て縛せられ、車に載せて「デルフ」府に拘引せられ、遂に投殺の刑に處するの宣告を言ひ渡されしことを無殘なれ。

伊蘇普實傳
以テデルフ
府民ヲ欺ク

實に物言へば唇擧しどかや。不幸にも一場の演説より「デルフ」人の怒を招き、身に覺なき濡衣を蒙りて、殘酷なる極刑を宣告されたる伊蘇普は、昂然として少しも屈せず。「デルフ」人に向ひ諭を設けて言ひけるは、或時一疋の菴小河一ッ隔て、住ける鼠を招待しけるが、さて其歸りに鼠は深く水心を知らねばとて、菴の鼠を己れの足に縛りて河を渡りしが、河の半ばに到りて、發俄に惡意を生じ、鼠を河の中に推し入れ、て之を溺死せしめ、己れの餌食にせんとなせしかば、鼠は驚きて之に抗し、數時の間揉み合ふ程に、一羽の菴大空より之を見て舞ひ下り、鼠を攫みて空中に飛び揚れば、菴も共に連れられて、果は同日最期に屍を曝しぬと説き來りて、更に聲を勵まし、殘酷なる「デルフ」人よ、今日余を殺さば他日汝等も亦た將に此の菴の運命を蒙らんとぞ叫びける。

されどもアルフ人の少しも之に順着せざるのみか却てさまざまに侮り罵りつゝ、遂に伊蘇普を刑場に引致せしが途中にて伊蘇普は敏くも監護者の隙を伺ひ、脱走してアポロン神の堂宇の内に身を潜めたり。監護者等ハ驚き騷ぎ諸方に走りて探索に手を盡くし遂にアポロン神の堂宇に匿れ居る處を見出して矢速に扉を開かんせしに、伊蘇普内より扉をしかと抑へ、此の堂宇小なれを畏くもアポロン神の鎮座在す所なるを汝等余を捕へんとて濫りに此神扉を汚さば神罰的面に汝等に及ぶへしと呼りければ、されを頑陋なるアルフ人は耳にも入れず遂に神扉を排して殿中に闖入し、伊蘇普を捕へてかたへなる「ヒアンペ」の岩上より數千丈の深谷に投げ落せしかば、何かは以て耐るへき身骨どもに徹底となりて立ち身らぬ深霧の中に果敢なき名残を留めしこそ、無残と言ふも愚なれ。

其後間もなくアルフ府に悪疫流行して勢最も猖獗を極め、日々之れに罹りて死するもの算を亂しければ、アルフ人は大に恐れ神佛に祈禱を凝し、陰陽士を呼びて之を占はしめしに、あは疑もなくアポロン神の崇なればアルフ人民の爲せる悪業を懺悔して、伊蘇普の魂魄を慰むるに外なしとぞ答へける。住民等は之を聽きてます。

恐れ直に一の三角塔を建立して、且つさまざまに祈禱をこらせしかば、やがて疾疫は止みたれども、アルフ人の所業は獨り天神地祇の怒を招きしのみならず、諸國の人民も亦た痛く其の背理を惡み、希臘國王の如きは將に使節をアルフ府に遣し、嚴しく其罪を責問し、重科を以て之を罰しけりとなむ。

伊蘇普實傳

伊蘇普實傳終

伊蘇普實傳終

救濟新報

每月二回發行
定價二角二分五厘

廣告料一行一回十五錢

社會問題の解釋を以て任じ、縱横の筆、雄活の文、盛んに社會救濟策を論じ社會研究に關する必
要の事項を載す此種の發行物としては實に吾文界の破天荒たり。

社説、正々堂々救濟の方策を論じ人をして一讀大に發明する處ありしむ

論説、社會に關する内外名士の卓論明説を網羅す

演説、諸名士の演説を筆記し人をして一讀自ら之を聽くの感ありしむ

社會、社會學並に社會問題に關する有要の事項を掲ぐ

教育、教育に關する萬般の事項を掲げ殊に「兒童研究」の一項を設け斯學に志ある者の參考に資す

訪問、諸名士を往訪し賜り得たる所説を掲げ人をして自ら之と接談するの快ありしむ

家庭、家政並に家庭教育に關する平易にして趣味ある記事を掲ぐ

史傳、社會改良家、慈善家、及び社會公益の爲に盡瘁せし名士の記傳を掲ぐ

文苑、和歌、新詩、漢詩等聯々珠玉を綴るが如し

小説、簡易にして興味ある記事多し

英、優麗高美、趣味あり理想ある短篇小説を掲げ言外深く樂しむ所ありしむ

其、他、名士の寄書多く見るべき論説記事あり

其、他、雜報には社會の出來事や網羅し院報は濃飛育兒院の記事を掲げ院日誌は同院の實況を寫し
得て有志家の參觀に價ひすべく寄稿は愛讀者の名文多し

發行所

東京市神田區仲積樂
町十七番地
濃飛育兒院東京支部

救濟新報社

内村鑑三先生著

●再版 求安錄

定價三十錢 郵稅四錢

●三版 地人論

定價四十錢 郵稅六錢

●三版 愛吟

(英和對照)

定價二十五錢 郵稅二錢

●月曜講演

定價二十錢 郵稅四錢

●目次

ガールを學ぶ利と害
ミケトダの米國詩人
文學としての聖書
南米詩人

●後世への最大遺物

定價十錢 郵稅二錢

●立志の礎

定價廿五錢

●倫古龍

定價廿錢 郵稅四錢

●社會改良家列傳

定價三十錢

●發兌

東京京橋區采女町廿四番地

●三版 人物論

定價十錢 郵稅三錢

●伊太利一統史

定價十五錢 郵稅四錢

●慈善問題

定價廿五錢 郵稅四錢

●感化事業の發達

定價二十錢 郵稅六錢

●古今仁人傳

定價三十錢

目次の主なもの

仁人の生涯——世界禁酒會々長ウカフリード女

生●クリンヤの天使●ナイヤンゲル●博愛

的事業●仁愛を説きし人——グラッドストーン

翁●ムーデー氏

警醒社書店

救濟新報社出版

伊蘇普實傳

完

定價二十五錢 郵稅二錢

割引定價十二錢

氷川清話

三冊

定價三十錢、一部郵稅四錢

全 二十七錢

慈善問題

完

定價廿五錢 郵稅四錢

全 二十三錢

日本陽明學

完

定價五十錢 郵稅四錢

全 四十五錢

馬來半島事情

完

定價六十錢 郵稅六錢

全 四十五錢

座右之銘

完

定價二十二錢 郵稅二錢

全 十一錢

日曜教話篇

完

定價二十五錢 郵稅二錢

全 十一錢

右者吾院の商業部にて賣捌致し居り候處尙今回吾院同情諸君子に對し年來の御厚誼に酬んが爲り特別割引致し況く販賣可申上候間何分御知己御朋友の方々へも精々御勧誘之上續々御注文有之候様伏して奉希望候最も代金は郵便切手にて不苦候

賣捌所

東京神田區仲藏樂町十七番地

濃飛育兒院商業部

爲替取組所は東京飯田町局宛

吉本襄撰

清水川

(入挿圖真外内邸川水并像宵之前新維及近最生先勝)

正編 (第八) 渡邊國武子願 東京日々新聞評海舟伯の
に加ふる味を以て之を開きて興味を、感するもの多し
南洲翁の人物評の如き維新の維新の所したる苦心談の如
き聞くべきものあり、一種の談話家たるは疑ふべからず、
雑誌陽明學の主筆吉本襄氏簡淨の筆を以て老伯の題字を以
て趣味を添ふるあり、燈下一讀の價值十分なりと云ふべ
し。

續編 (第四) 谷干城 日本新聞評發に出版しもの
が奇警超脱の口調宛として其の人を見るが如し。古今を
論じ英雄を評し、世道人心より種々社會の方面に入つて
機上己の翁と對すべく、縁蔭榻下又此翁と對すべし。
清透の氣を以て巧みに古今の人物を評し、翁が縦横の辨
在、一面又一面、千干又一角、宛として古今賢豪の紙上
に躍るを見る而して翁の洒落にして狡獪なる東湖小補、
南洲に交るに八百松の主婦、富貴樓の女將を以てし、紅白
點綴堅韌互人をして應接に迫らざるしむるの妙あり、
然かも一評一言天理人道の常態を離れず、觀と來れば天
定價 郵券代用書しからず。一の方は一割引。發行所 東京牛込區錦
土前町卅番地、鐵華書院 濃飛育兒院商業部

下の英雄も酒軍の女將も同じ是れ行徑一軌、
を樹へし。究竟翁は所世秘訣を以て誠の一字に歸す。
定價 郵券代用書しからず。一の方は一割引。
發行所 東京牛込區錦土前町卅番地、鐵華書院
濃飛育兒院商業部

東京神田仲猿樂町九番地 濃飛育兒院商業部

曼能

佛蘭西 ヴァルテール氏原著
大日本 羽陽散 士意譯

今は昔、曼能といふ男ありけり、或日の朝の寝ざめに、ふと大膽なる祈願をぞおま
しける、そは完全無瑕の大聖人となりて世の尊敬を受けんとの大望にぞありける。
さて、曼能が大聖人となるためにて、心にちかひいましめける條々は
一 過度の飲食を食する事 胃を傷め神を害し凡て智慧才覺を鈍くし、身体の健
康を失はしむるものば、皆過飲過食によれり、されば美酒佳香も、身心磨滅の毒
藥と觀じさば、多くの食慾を誘ふることなかば、
一 女色に近かよる事 書しより學問を廢し志を挫き、あたらし有爲の天才を持
ながら遂に一世の胡盧となり、父母祖先の名を汚がし、空しく家國をも失ふに
至るものは、多くは色香に迷ふによれり、外面女菩薩、内心女夜叉、女は身を食む

曼能

一

曼能

佛蘭西 ヴァルテール氏原著
大日本 羽陽 散 士意譯

今は昔し曼能といふ男ありけり、或日の朝の寝ざめに、ふと大膽なる祈願をぞおま
むける、そは完全無瑕の大聖人となりて世の尊敬を受けんとの大望にぞありける。
さて曼能が大聖人となるためとて、心にちかひいましめける條々は

- 一 過度の飲食を貧る事 胃を傷め神を害し凡て智慧才覚を鈍くし身体の健
康を失はしむるものは皆過飲過食によれり、されば美酒佳香も、身心腐爛の毒
藥と觀じさば、多くの食慾を誘ふとよかるべし、
- 一 女色に近かよる事 昔しより學問を廢し志を挫さあたら有爲の天才を持
ながら遂に一世の胡虜となり父母祖先の名を汚がし、空しく家國をも失ふに
至るものは多くは色香に迷ふによれり、外面女菩薩内心女夜叉女は身を食む

魔物と思はれ中々うばちかくよるべくとも思ふまじ

他人と争訟をなす事 争へばこそ怨もすれ怨まれもせめ、あらそはず怨

からず總てまことを以て交らんには四海のうち皆兄弟となるべし、われには

父母の遺したまへる財産あり、コ、ノの銀行に預けあれば、其日に困る事もな

し其他には貸もなければ借もなし、他人と争ふまじなどは枉げてもあるべき

咎もなし

曼能は斯く聖人となる手段も、れふかた定まれば、はや心は聖人となり、濟し胸いと

ひろくなりければ、やがて寢床を立出で、先づあざやかなる朝風に心の塵を洗はん

と窓の戸おしあけ四方を咏めて居たりけり

此家の南手に當りて、大なる楓の樹あり、其木の下に、一人は四十路許りの老女、一人

はまだ十七八許りなるいと初ひノ、しき乙女子の漫歩をなせるなり、老女は至て

氣もかるくいと打興せるさまなるも、乙女は其のあいしく未たおぼこげさる

にも似ず、ひたふる物おもはしき風情にて、或時は空を仰ぎて嘆息し、又は首を垂れ

てあんに入るさまいかにあわれに見えにける、曼能は始めより、打ち咏めて居た

りしが此うつくしくあはれなる乙女のさまに氣を揉みつさてもあはれや、まだ憂
を知るべき年にもあらざるに、如何なる事の氣にかゝり、斯くは憂に沈むらん、今わ
れ聖人となる手始めに、此つみのなき乙女子を、沈むるうれいのふち瀬より、助け出
すもまた一のよきくせくとなるべけれなき、思ひ續けて居けるうち、老女は何時か
立去りて女ひとりになりければ、いでや其うれいの本をさぐらんと、乙女のそばに
立至り、うれいのさま見たるよしを告げ、一臂の力もならんと云ひければ、乙女は
世にもうれしげに曼能を見かへりつ、さても心の秘事を見せまいらせたるはづか
しさよさりながら、世にも人にも捨られて、たよる方なき妻の身になさけのあつき
言の葉を、かけたまふおん心のうれしさよ、さらば耻かしながら一通り妻の憂の本
末をかたり申さん、聞てたべ、妻の身には父もなければ母もなく、叔父の手一つに育
てられ、斯ふ人となり侍べるが、叔父は世にも恐ろしき奸曲者にて、我父母の妾へと
て遣し給まへる財産を、皆我が物としたるうへ、尙さまくの無理非道朝な夕暮に
言掛られ世にたよりなき妾には、何と詮方泣ばかりひるは終日、夜は通宵見給ふ如
くなげきては、あぢきなき世を送り侍べるあわれ賢きとの、力にて此かなしみを

救ひたまふすべあらば、一樹の蔭も他生の縁、妾をたすけたまへやとて、さめくどかきくどき、尙ほさまくと叔父の悪事をつけ、れば曼能は齒切りして叔父の非道を怒り、いでやわれもふれよりおん身が家にゆき、叔父御の非道を諫めもしおん身の愛をも救はんとして共に同伴、乙女が家に到りければ、女乙は世にもたのもしげに先づ我家にはせ入りつ、暫くして出来り、曼能の手を取りていと興まりたる室に誘ひ、酒など出しもてなした、今は叔父も留主なりとて、其身も曼能の側に坐し、尙ほ過去の不幸を説き、更らに現在叔父の非道のさまを色々形容して語りければ、曼能の聞く度く、にいよ、叔父の無道を怒り、且は乙女の身を憐み、一心にそが訴へを聞き居けるが、時々目をあげ乙女を見るに、乙女は生れ得たる窈窕の姿に充分の愛をたくわへ、雨を帯たる海棠のさまをも、謂われぬ風情なりさるに、又不思議や曼能が見る度に、乙女は曼能の顔打ち守り、眼中無量の秋波を浮べ、只々曼能を唯一の神とも佛とも思ひ入りたるさまなれば、曼能が初は只々不憚とのみ思ひし心何時となく可愛と云ふ心に變じ、叔父の留守さへ幸ひと、思ふ心になりゆきて、乙女の話を開きつゝ、も次第に乙女にちかよりつ、今ははや今朝立たる聖人の志さへ、打忘

れ身を喰む魔物と、思ひてし女の體にひしくと我をもしらせ、よりつきける、斯るところに室の戸を破る、許りに打開き、すさまじき物音して、飛込たるものよ、それ曼能はおどろきうろたへ、身を退りて之を見るに、是を乙女のかたりし叔父にてやあらん、ふとくたくまじき漢の鬚蓬々とはへたるが、手に一振の劔を携へ、大の眼をくはつと見開き、暫く曼能を睨み居けるが、忽ち大音聲をふりあげ、ヤ、にくさま、あ白痴奴、男の留主なる女の家、に忍び入りたるのみならず、遠慮もなく女の側にちかよりたる大罪人、いで世の痴漢の見せしめに、此大刀にて首はねくれん、そこ動くなど、呼りける、曼能は氣も魂も身に添はず、唯ふるくとふるふのみ、言句も出でず居たりしが、漸々にして、ボケツト探ぐり、悉く身につけたる貨幣を出し、これにて命許を助けたまへと、泣かん許りにたのみければ、漢は許すべき奴にはあらねど、今日ばかりは助くべし、再度来らば免さざと、腕付けられ、曼能は、やう、命拾ひし心地して、忽々この家を逃げ出で、息を切てぞ我が家に馳入りける。曼能は第一若に女の爲めに身を誤り、殆んど其身も危かりしが、やう、に逃れて我家に歸り、其儘椅子に身を投げかけ、茫然としてありけるが、ふと卓不を見れば、一

個の書状あり取り上げ見れば親友某より今日誰彼より集ひ會食をなす約束なれば、足下も来よとの招き状なり、曼能は今朝は返返しもつかぬ恥をかきたり、此の爵を散せんには親友との會食こそ適當なれ、且親友と少々の飲食をしたればとて、倫理の道に背きもすまじ、まねざあるころ幸かれ、いで其會に臨まんと汗にぬれたる衣裳を着かへ、親友許にぞ趣きける

親友の宅に、既に誰彼大勢集りて、會食も早やたけなわに、いと賑ひて居たりしが、今曼能が來れるを見て、親友達は皆な共に杯を持ち、壺を持ち、曼能のそばによりつせひ、何とて此くは晩かりしぞ、又何とて顔の色の青く不興氣なる、先づ酒を飲で早く元氣を付けよなぞ、勸められ、曼能は愛を拂はん爲めの一二杯は、樂にあそなれ、害にはならずと、始めの程は理由をも付け、勸めらるゝ、儘受けたりしが、何分大勢の會合とて、おひくゝと杯重り、今は曼能も大に酩酊し、一同と共に狂ひ回りけるが、誰が言出しけん、骨牌遊をなさんとの發言に、一同賛成し、大勢よりて物をかけ遊興にけるが、第一番に曼能の負となりければ、曼能は残念に思ひ、更に始めに倍して掛たるに、是さへ負となりければ、いよく腹立しさに更に又之を倍してかけ、るが又

々其身の自となり、之を取り戻さん爲めに、とて、際限もなくかければ、夥しく負にける、斯る折から何事をか言ひ論がひけん、忽ち一坐の争ひとなり、一人が大に怒り、墨壺取つて投げたりしが、其毒いたく、曼能の目に當り、悶絶して倒れければ、人々大に驚き、騒ぎ大勢して、曼能をかき擔ひ、曼能の家を送り届ける、曼能は我が家へ送り歸されけれども、酒の酔と身の疲にて、人心地もなく打ち伏しけるが、暫くして目を覺し、始めて我が家に歸り居けるを知り、身を起して立ちけれども、眼の痛甚しければ、家僕を醫者に走らせ、藥を取りて目に張り付け、さて今日會合の事を考へけるに、思の外に酒を過し、かるた遊にいたく負け、遂に喧嘩を仕出したるを思ひ出し、大に後悔しけれども、今更詮なければ、賭にて負けたる借を拂はん、と家僕に命じ、兼て我が資産を預け置たる二、三の銀行へ遣はしける、しばらくして家僕は大息ついで馳せ歸へり、あはれや、二、三の銀行は、昨日廢業を廣告し、其店を閉たれば、それに關係ある許多の人々は、皆其資産を失ひて、空敷其店前に群集なし、儲々する許りなりと、告げれば、曼能は大に驚き、且つ怒り、梁の如く資本の儘かなる銀行にて、斯く速かに廢業すべき謂なし、是れ必を銀行人等が不正を企て、斯る所業に及び

しならん、いで、是より國王に訴へ、我が資産を取り戻し、兼ねては此不正の奴等を懲して呉れんと、早速に用意を整へ、王城指して立ち出でける、既に王城近くなりける、とあるに、今しも王の何方へか行啓あらせらるゝところにて、前驅の警部二人騎馬にて馳せ來り、間もなく王は夥多の官吏に供奉せられ、徐々々と來り給ふ、曼能は地に平伏して在りけるが、王の既に我前に來り給ふを見て、伏したる頭をもたげ膝行してや、王の前に進み出で恐れながら直訴すべき急件ありとぞ呼はりける、王は聞召し其詞を止め給ひ侍従をして何事ぞと問はせられければ、曼能は蹠で銀行不始末の次第を訴へ、幾多の家族は是が爲めに非常の災害を蒙りたれば、速かに其頭取を取訊し、臣等もろくのなげきを救はせ給へとぞ訴へ申しける、王は早速に其供奉中にありける町奉行の官人を召し、此訴訟を裁断せよと命じ給ひ、其まゝ行過られければ町奉行は一人跡に残り、曼能を木蔭に呼び寄せ、大に憤りたる顔色にて聲荒らげ、まはるこな片目なる訴訟人よ、銀行の頭取、我か妻の從弟なるを知らざるか、渠の利巧にして正直なるは吾れ能く知り、なんじよう曲事のあるべきをまして汝は奉行たる我にもつげず、國王に直訴をなしたるは、一方ならぬ罪な

れと、今日は聊か心祝の事あれば、着るしてやらん、疾くうせよと飽迄威をかける偏私の裁断餘りの非道に、曼能は涙出るほど腹立たれども、他に詮方もあらざれば、恨を呑んで立去りける、跡見送りて町奉行ニヤリと一つ苦笑、供奉の列に加はりて、王に媚んと馳せ行さける、去る程に、曼能は今朝まだ床の内にて、悪人となる志願を立て、第一に過飲過食を戒め、第二に女色を戒しめ、第三に訴訟を戒しめたりしも、まだ朝の間に女に誤り、欠は飲食に身を害し、今は訴訟に耻を受け、資産さへも失ひつ、全く思の外の身となり果て、心中無量の憂を抱ひて、やうやく我が家は近つさけるが彼の朝に小女に遇ひし、榎の下にかの志女は、曼能は好曲漢と罵りたる後の叔父と、さも陸げに、手を取り合ひ散歩をなして、いたがしが今しも曼能が眼に涙を塗り、色蒼く悄然として歸り來れるさまを見て、眞と互に指差し合ひ、あのさま見よと大に笑ひ腹を抱へて立去りたり、曼能は疾く悔しさがきりなげれど、之を追ひ行く力もなせや、我が我家に大らたどせしに我家には、賣却の張符あり、許多の買人ひらがりつと、以建具敷物の差別なく、今競賣の最中なれば、曼能又もいたも呆れ、是は如何にぞ尋ねれば、今日親友の

しならん、いで、是より國王に訴へ、我が資産を取り戻し、兼ねては此不正の奴等
 を懲して呉れんと早速に用意を整へ、王城指してぞ立ち出でける、既に王城近くな
 りけるに、今しも王の何方へか行啓あらせらるゝと、ころにて、前驅の警部二
 人、騎馬にて馳せ來り、間もなく、王は夥多の官吏に俱奉せられ、徐々として來り給ふ、曼能
 は地に平伏して在りけるが、王の既に我前に來り給ふを見て、伏したる頭をもたげ
 膝行してや、王の前に進み出で、恐れながら直訴すべき急件ありとぞ呼びける
 王は聞召し、其儀を止め給ひ、侍従をして何事ぞと問はせられければ、曼能は、
 行不始末の次第を訴へ、幾多の家族は是が爲めに、非常の災害を蒙りたれば、速かに
 其頭取を取訊し、臣等もろくのなげきを救はせ給へとぞ訴へ申しける、王は早速
 に其俱奉中にありける町奉行の官人を召し、此訴訟を裁断せよと命じ給ひ、其まゝ
 行過られければ、町奉行は一人跡に残り、曼能を木蔭に呼び寄せ、大に憤りたる顔色
 にて、廢荒らげ、まはるこな片目なる訴訟人よ、銀行の頭取、我が妻の從弟なるを知
 らざるか、渠の利巧にして正直なるは吾れ能く知り、なんじよ曲事のあるべき
 ぞまして汝は奉行たる我にもつげず、國王に直訴をなしたるは一方ならぬ罪な

れど、今日は聊か心祝の事あれば宥るしてやらん、疾くうせよと飽迄威をかける偏私
 の裁断餘りの非道に、曼能は涙出るほど腹立たれども、他に詮方もあらざれば、恨を
 吞んでぞ立去りける、跡見送りて町奉行ニヤリと一つ苦笑、俱奉の列に加はりて、王
 に媚んど馳せ行きける、
 去る程に、曼能は今朝まだ床の内にて、聖人となる志願を立て、第一に過飲過食を戒
 め、第二に女色を戒しめ、第三に訴訟を戒しめたりしも、まだ朝の間に女に誤り、次は
 飲食に身を害し、今は訴訟に耻を受け、資産さへも失ひつ、全く思の外の身となり、果
 て心中無量の憂を抱ひて、やうやく我が家に近づきけるが、彼の朝に小女に遇ひし
 楓の下にかの乙女は、髪は好曲漢と黒りたる彼の叔父と、さも陸げに手を取り合ひ
 散歩をなしていたが、今しも曼能が眼に藥を塗り、色蒼く悄然として歸り來れ
 るさまを見て、漢と互に指差し合ひ、あのみさま見よと大に笑ひ、腹を抱へて立去りた
 り、曼能は疾くさ悔しさがきりなけれど、之を追ひ行く力もうせ、やおら我家に入ら
 んどせしに我家には、賣却の張符あり、許多の買人むらがりついで、建具敷物の差別
 なく、今競賣の最中なれば、曼能又もひとと呆れ、是は如何にと尋ねれば、今日親友の

2/10/1900

賭事に負けたる拂の爲めにとて親友共の評議にて我が家を公賣に付したるなり
けり

曼能は親友達の盡力に我家を公賣に付せられて住宅さへも失ひぬれば今は毒人
たらん氣力も抜け儘に残れる我家の裏の木小家のうちに倒れ入り死ぬべき心地
に打ち伏して悲しき夢をぞ結びける

朝われ夢のさめしとき かしこき聖の心地して

眞如の月を打ちながめ 清き心に浮世のちりを

拂ひ去りつゝ起出しが 眞如の月いつかの間に

くもにふはれ忽ちに 常闇の世となりはて

魘魅魍魎の糸はとなり 西につまづき東に倒れ

よるの眠に就くときは 地獄の苛責に身を置ぬ

さても六かじ嗚呼難や ころの揮の探り方は

曼能終

明治三十二年一月廿九日印刷 定價十五錢
同 三十二年二月一日發行 郵税二錢

著者 秋野繁吉 東京市本郷元町二丁目三十番地若北館

發行者 五十嵐喜廣 東京市神田區仲猿樂町十七番地

印刷者 松本隆海 東京市神田區仲猿樂町十七番地

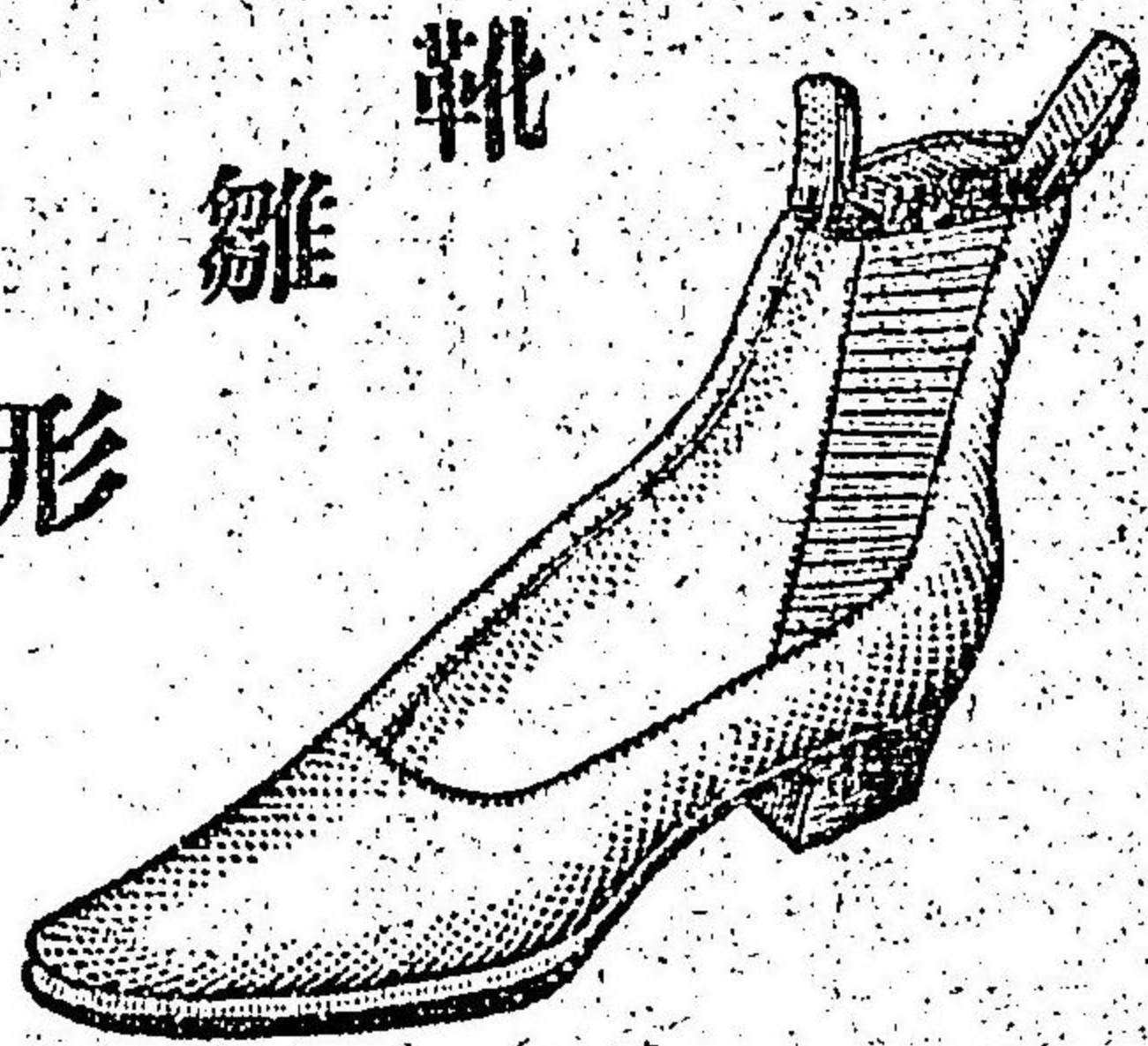
發行所 救濟新報社 東京市神田區飯田町四丁目三十一番地

印刷所 成功堂 東京市神田區仲猿樂町十七番地

賣捌所 濃飛育兒院商業部 東京市神田區仲猿樂町十七番地

◎靴製造及脩繕廣告

各種の靴製造及次脩繕の御需に應じ度候間陸續御注文の程伏して奉願上候



靴
雛
形

深ゴム靴
和製甲革
金三圓七十五錢
金三圓七十五錢
全筒フラス五錢
金三圓七十五錢
金三圓七十五錢
金三圓七十五錢
金三圓七十五錢
金三圓七十五錢
六圓二十錢

注意

本院靴工部に御注文爲被下候御方々左の箇條御承知有之度候也○本院製造の靴は必ず部長上野の燒章を付印可仕候○水防靴の高價なるは世間一般の事に御座候得共本院は通常靴と同價にて調進可仕候○水防靴は特に御試用あらん事を希望仕候○本院へ御注文の御方々へは製靴出來後十回迄は御愛顧に酬ひんが爲め特別無代價にて靴磨可申上候

四方各位

向く御注文の節は端齋にて御一報被下候は、東京横濱は迅速參堂御相談可致候

東京神田區表神保町十番地にの六

濃飛青兒院靴工部

◎教文館近刊廣告

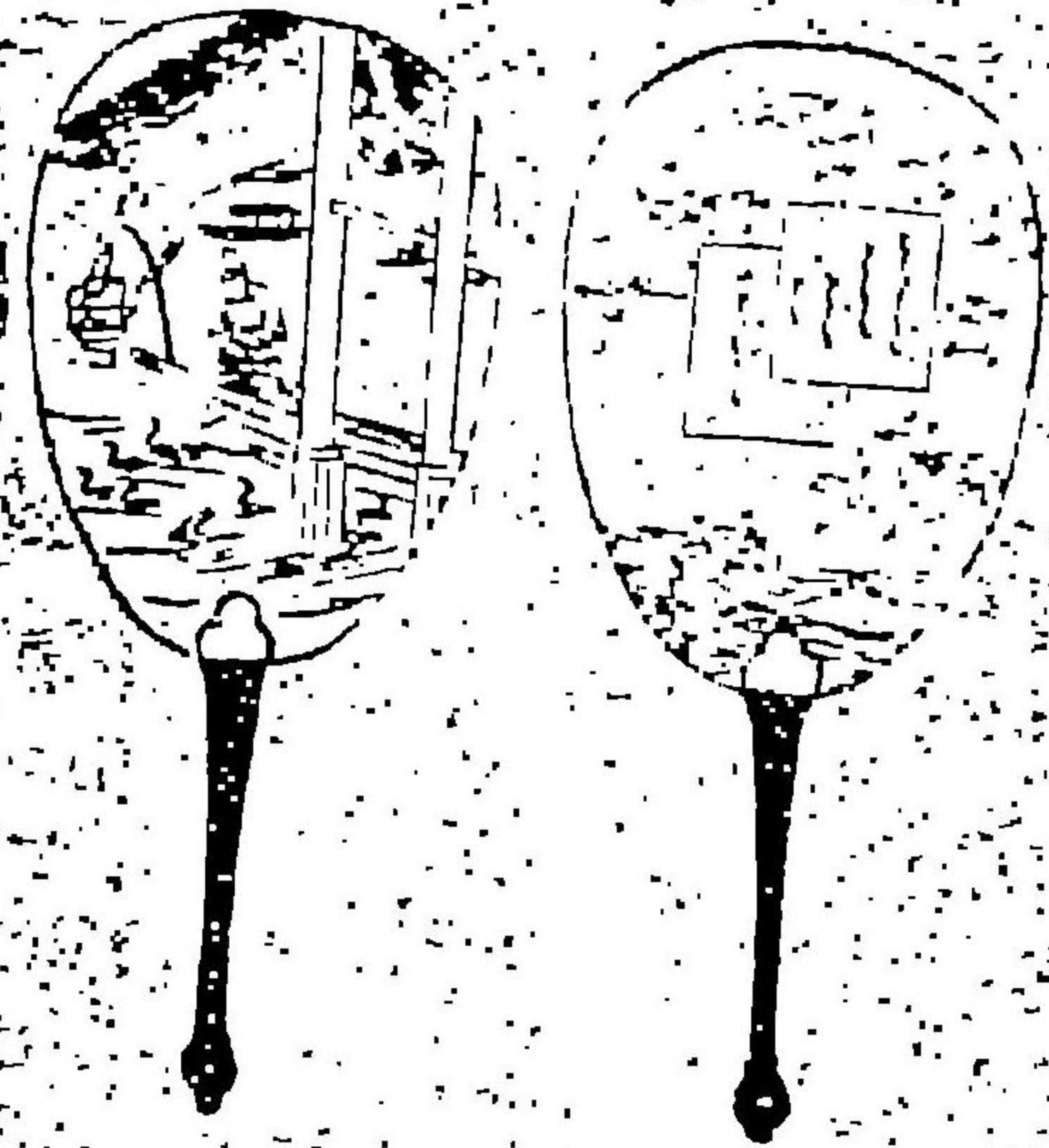
- ◎聖き生涯 定價 二八錢 郵税 二錢
- ◎傳道策 定價 二五錢 郵税 二錢
- ◎新約空路 定價 四角 郵税 二錢
- ◎最古の手翰 定價 二角 郵税 二錢
- ◎救の歌 定價 二角 郵税 二錢
- ◎基督教信徒の義務 定價 二角 郵税 二錢
- ◎福音同盟會演說集 定價 二角 郵税 二錢
- ◎禁酒論 定價 二角 郵税 二錢
- ◎聖書研究の利益 定價 二七錢 郵税 四錢
- ◎日新の宗教 定價 二二錢 郵税 二錢
- ◎棄てられたる神 定價 二七錢 郵税 二錢

發行所

東京 墨田區 四丁二丁目

教文館

漆團扇發賣廣告



鶴創畫
聖語和歌入
花鳥 講

右の年の通、御覽 廣告用、御覽に、此の團扇仕り
 櫻田橋土代町三丁目一番地
 販賣取所 櫻田橋土代町三丁目一番地
 東京市上野区一丁目一番地
 東京市五城町
 濃飛育兒院團扇部
 東京市神田区仲達町十七番地
 東京支部 商業部

81
174

◎我國唯一の文章講義録發行◎

大日本文章學會

文章通
信教授

學科及講師

國文評釋	大學院文學士	大町芳衛
漢文評釋	文科大學卒業	田岡代治
日本文典	大學院文學士	杉田俊介
修辭學	大學院文學士	内海弘毅
故事類編	文科大學講師	赤城二那
文章組立法	文章專修會長	中島幹事
文章雜話	文章大家	衣田百川
日本文人傳	米國文學士	江藤專三
漢文法解	海軍教授	大沼鶴林
譯文法	講義師	未定
文章百話	高等商業教授	松本道多
日本文章史	文學得業生	松本道別
名家文範	明治名家文範	本會編纂
名家文範	名家文章論纂	本會編纂
助字法	新聞雜誌學	本會編纂

文章は思想を表はし感懐を漏すの具なれば、いかなる人にも必ず脩めざる可からざるものなるも、其書乏しく其師少くして、之を學ぶの困難なるは世人の均し、嘆する所也。本會深く之れを憂へ、這回女壇知名の大家を招聘して、文章講義録を發行し、大に斯文の爲めに盡す所あらんとす。學科の講義は簡明切を主とし、文章の添削は丁寧懇切を旨とすべければ本會講義録一度世に出でて、吾國文章界の面目一新すべきは本會の今日に於いて、固く信する所也。

(略則) 學期、一月に始り十二月に終る。講義録は毎月二回一回大判八十頁とす。●質問は生徒の自由とす。●卒業試験に及第せる者には各講師連署の卒業證書を附與す。●(會費) 東條三十錢。●月謝一ヶ月廿五錢。●文章添削は無料とす。●細則は申込次第進呈す。

東京市神田區一橋通町七番地

大日本文章學會

1



伊蘇普實傳

205023-000-8

81-174

伊蘇普實傳

堀 三友
秋野 繁吉 / 編

M32

EDV-0015

